

新作は3つの“最”を持つ



助手席サイドに履かせた ZR10 2P は、チタンブロンズのディスクにバファルマイトのリムという構成に。このようにディスクとリムのフィニッシュを変えることで、オーナーの理想とするホイールに近づけられるのもインセット調整と並ぶ 2P のメリットであり、そのカラバリに長けているのがワークのストロングポイントだ。

KUHL RACING × SUBARU BRZ

WORK EMOTION ZR10 2P

- サイズ：18 × 7.0J ~ 12.5J フルリバース / 19 × 7.5J ~ 12.5J フルリバース / 19 × 8.0J ~ 12.5J リバース / 20 × 8.0J ~ 12.5J リバース
- H数 & P.C.D：5H-100 / 114.3
- カラー：グリミットブラック、チタンブロンズ、ブラック、アズールホワイト
- 価格：6万8200 ~ 10万3400円

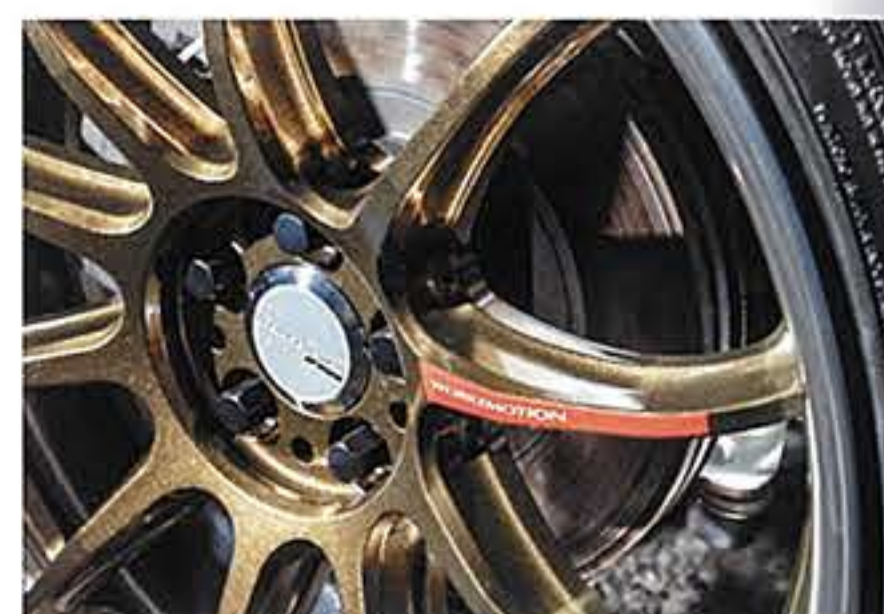
車体は、愛知、埼玉、大阪、栃木で展開しているクールレーシングからお借りした。同社製のエアロと2テールマフラーのほか、ブリッツのZZ-Rダンパー、クスコのリアアームで足腰を自在にコントロール。



運転席側のリア。グリミットブラックのディスクに、カスタムオーダーで選べるブラックアルマイトリムを合わせた。質感の異なる2色の黒の交わり、いとエロスなり。



ディスクに WAE の文字が。これはワークアドバンストエディションの頭文字を取ったもので、優れた性能を持つモデルにのみ授けられる“名譽勲章”なのだ。



10本のスポークを規則的に並べただけで終わらないのが、ワーク開発部の職人魂。スポークの天面はセンターからリムにかけて直線的に折れ曲がったり、ゆるいカーブを描きながら曲がったりと、アクセントという名のステップをいくつも踏みながら進んでいく。また、スポークの側面には細身の天面の繊細さを邪魔することなく、それでいて強度を持たせるようなレース用ホイール直伝の造形的配慮を備える。



クルーズシリーズのエアロは、シンプルデザインがウリ。ここではフロント／サイド／リアの3点セットでアンダーパートに疾走感を与えにかかると。なお、サイドとリアはトヨタ GR86と兼用だが、フロントだけはバンパー下面の形状が違うため、それぞれの専用部品をお買い求めいただきたい。

ワークエモーションZR、T5R、T7Rには共通点がある。スタンス界隈で人気大爆発のホイールだって、こともそうなんだけど、1ピースと2ピース、2つの攻め方ができるって点でもガッツリ共通しているのだ。そんな攻めのバリエーションを持つシリーズに、ニューフェイスが爆誕。細身の10スポークが安定と洗練を感じさせるZR10の2ピースだ。ウリとなるのは、ワークエモーションシリーズ最大レベルのリム深度、スポーク長、軽さ。以上、3つの“最”を備えること。リム深度とスポーク長は魅せ自慢のオーナーたちにとって必要不可欠なモノだし、軽さは走行重視系オーナーにマストな条件だ。そのどっちの欲求をも満たし、そんでもってまだだれの色にも染まっていない新作となれば、もうZR10 2Pを選ぶのは現時点でのベストな選択肢と言いついていい。実際に車両に装着してみたカンジはどうか？ クールレーシングのエアロシリーズ“グルーズ”を組みつけた新型BRZに、19×9Jを履かせてみる。厚みを抑えたF/S/Rのディフューザーとのカラミはケチの付けようがなく、ブリッツのZZ-Rダンパー、クスコのリアアーム、クールレーシングのマフラーとの相乗効果で、ボトムにシャープなキレ味を印象づけた。ZR10 2Pはこれまでのワークエモーション同様、ディスクやリムのカスタムアレンジにも対応してくれるとのこと。そうと決まれば、理想の仕様を即オーダーするしかねえっ！

NEW RIMS NEWS

昨年末に発表されたワークエモーションZR10 2Pは、その名が物語るように既存のZR10の2ピース仕様となる。レース用ホイールをルーツに持つエモーションのZ(ZEAL=情熱)とR(レーシング)が2ピースになることで、カラーコンビネーションとインセットの自由度が一気に急上昇。ドレスアップ系ホイールとしても、もう見逃すわけにはいかんのだよ！

source：ワーク 06-6746-2859 / 048-688-7555
052-777-4512 <https://www.work-wheels.co.jp>
spl thanx：クールレーシング 052-693-9893 <https://kuhl-japan.com>
photo：Keisuke Noguchi
text：Akio Sato (rsf)



WORK EMOTION ZR10 2P

ワーク エモーション ズーアールテン ツーピー

- BASE CAR：2021 SUBARU BRZ
- EXTERIOR：KUHL RACING KRUISE KR-ZD8RR (FRONT DIFFUSER/SIDE DIFFUSER/REAR FLOATING DIFFUSER)
- WHEELS：WORK EMOTION ZR10 2P (F & R=19 × 9J)
- TIRES：FALKEN AZENIS FKS10 (F & R=225/35-19)
- SUSPENSIONS：BLITZ ZZ-R DUMPER、CUSCO REAR UPPER ARM/REAR LOWER ARM/TOE CONTROL ARM
- TUNING：KUHL RACING KRUISE SLASH CUT 2 TAILS MUFFLER
- INTERIOR：KUHL RACING FLOOR MAT

THE FOUNDER

art of wheel

WORK

2代目襲名

「ワークの意味？ そりゃあもう労働作業。働かざる者食うべからずですよ（笑）」

会社名の由来を聞いた途端の、先制パンチだ。

「でも、それは表向きの笑い話（笑）。辞書を引いてWORKの意味を調べていくと、最初のほうに載っているのが『働く』とか『仕事』とかで、後ろのほうに『芸術品』みたいな意味も載っているんです。本当はそっちの意味ですね。ただの機能部品ではなく、我々が作っているホイールは芸術作品だというプライドを持っていたい。カッコつけて言う（笑）」

さすがは東大阪生まれ、東大阪育ち。笑いのオブラートでマジメな話をスツと包んでくる。ひと言目の会話のラリーだけで、すっかり場の空気は彼女の支配下に置かれていた。田中知加（ちか）。天下のホイールメーカー「ワーク」の2代目社長として、6年前から170名にも及ぶ社員を引っ張っている女傑だ。ワークの創業者にして実父である故・田中毅氏の長女という血統を踏まえ



2012年、ハワイで行われたローカルイベントに参加。出張中の休暇を利用して島を一周したときの知加サン（左）と先代。当時、知加サンは海外事業部に在籍していたため、先代の海外出張に同行する機会が多かったという。

THE FOUNDER

パーツ

ART OF WHEEL, WORK OF WHEEL
社長に生まれたのではない。
社長になった女

偉人伝

株式会社ワーク 代表取締役
田中知加

です。よ。なので、そんな弟を見捨てるわけにもいかず、自問自答したんです。『自分はやりたいのか？ やりたくないのか？』と。で、やってみたいと思ったんですよ。だから、社長就任は自分で決めたこと。父に言われたからじゃない。たとえ苦労したとしても、だれのせいにもできないし、しゃやいけな

ないし、しゃやいけな。幸いなことに、海外事業を担当していたときの同僚がいっぱいいました。会社の中に。仲間たちがいっぱいいて、1人ぼっちじゃない。『これならチームとしてやっていけるな』というの、社長を引き受けた理由です。

私は私の色を出す

だが、先代の娘という看板だけでスライスイ渡っていきけるほど、自動車業界というオートコ社会は甘くはない。古株のおちゃんたちから「お前に何がわかんねん」と、キレられることもフツーにあったという。しかし、そんな場面を下を向かず、ポジティブに考えられることが彼女の強みだ。

「逆の立場だったら、私も同じようなこと言ってるしね（笑）。でも、まだ私は何もしてないのにそう言うことおっしゃるのはナンセンスだ。だから、腹は立たない。そんな外部の声を気にするよりも、ワークのみんなと一緒に仕事することのほうが大切。外部の声にいちいちブレてたら、みんなを守れないですよ。」

具体的に、先代はワークというブランドを築き上げました。じゃあ、私は何をやるのかというと、ワー

「我々が作っているホイールは芸術作品だというプライドを持っていたい。カッコつけて言う」と

スタンスシーンを彩る小道具は数あれど、主役を食うほどの存在感を放っているのはホイールで間違いない。その業界のトップランナーであるワークの2代目社長を、今回のゲストとして迎えることとした。父である先代といかに過ごし、いかに会社を受け継ぎ、膨大なラインナップをどう生んでいるのか？ 90分にわたる熱のこもったトークを、4ページに集約してみた。ヤケドに注意して熟読すべし。

source: ワーク 06-6746-2859 / 048-688-7555 / 052-777-4512 <https://www.work-wheels.co.jp> photo: Hiroyuki Urano text: Akio Sato (rsf)

「想いが感じられたら、必然的にGO。物作りには、そういう想いがなければムリ」

やってみないと分からない

ワークのホイールを見ていて、いつも思うことがある。それは流行を取り入れるスピードの速さだ。「昔のホイールを履く人が増えてるよね」と思った次の瞬間にネオクラ路線のシーカーが出てきたり、「アウトドア系、盛り上がりつつあるね？」の声を聞くと同時にビードロック調デザインがラグがリリースされるなど、タイムロスが全然ないのだ。この背景には、ワークという会社の独自性があると知加サンは教えてくれた。

「ワークと他社さんを比べて一番違うのは、直販していること。代理店さんや問屋さんとかを介さずに、会社の営業マンが直接売っている。彼らのアンテナが、そのまゝ会社のアンテナなんです」

彼らが集めてきた情報を吸い上げて、マーケティングの要望や状況を分析。その開発をどうやって、販路をどうするかというのを同時進行していかないとスピードアップはできない。そこで、営業、製造、開発などの組織を横断したプロジェクトチームを3年ぐらい前から立ち上げて、彼らが市販化までのスピードをすごく早めてくれるんです」

なるほど、スピードアップの秘密は分かった。だが、ちょっと待て。ゴ

サインを出すのは彼女自身。OKを出す・出さないの判断基準はどこにあるのか気になるではないか。

「私、なんでもOK出します。だって、やってみないと分からないじゃないですか(笑)。もちろん、『やってみないと分からない』という言葉のウラには、やってみるまでの綿密な計画とか、こうだからやってみてみたいな信念がないとダメ。その想いが感じられたら、必然的にGOです。物作りには、そういう想いがなければムリ」



2016年、茨城で行われたイベント「ホッツスプリングス」にて、社員さんと一緒に取材に応じてくれた知加サン(中央)。常に現場の声を聞く姿勢は、社長就任当時から一貫している。

絶対的ストロングポイント

ワークならではの個性を語る上でもう1つ欠かせないのが、個別対応システムの充実っぷりだ。カラリズムやセミオーダーカラーといったディスクの色替えに、リムアレンジ、リムレーザータトゥーなどなど、「どんだけバリエーションあるのよ?」と、うれしい悲鳴が止まらない。これ、ホイールを買う側にとってはありがたいすぎるシステムなのだが、逆に作る側はどう捉えているのか?

「これこそワークのストロングポイントですよ。ワークがやらないでだれがやるっていう(笑)」。2ピース、3ピースがあります。さらに色も選べます。バリエーションの多さがボクらの強みなんです。って、ワークくんは声を大にして言ってる。

スタンスシーンでも使っていたたくさん機会が多いのは、ユーザーのみなさんが自分だけのホイールっていうものをワークくんと一緒にしゃべりながら、カタログを見ながら作れるから。そういうことが、たぶんウケてる。これも価値観というか、多様性の1つやと思いますわ。価値観ってすごく変わってきて、自分だけのものを持っている優越感に浸れることが大事。

スタバでもそうですよね。自分だけのやつ、カッコよくオーダーしたいですもんね。なんかとかんとかエスプレッソショット追加とか。あれも一種の優越感(笑)。だから、もっと特別感を出したい、届けたいって思いますね。

マイスター誕生秘話

ワークといえば、マイスターシリーズのこともぜひ聞いておきたい。ベアスカの安い高い、カスタマイズの多い少ない、ジャンルの魅せる走るにカンケーなく、さらに時間をも超えて愛されているホイールなんて、ほぼほぼこの世にないからだ。

「28年になるかな? マイスターが生まれてから。愛されポイントは、どシンプル」であることですね。だって、ホイールですよ? 作品だとかどうとかって最初に言うてますけど(笑)、ホイールってクルマとセットにならないといけないワケで、マイスターはとってもシンプルで飽きがない。ホイールだけ見ても飽きない。それがまず1つ。次にバリエーションが組み立てホイールの中で一番多い。一番大きいリム(最大16J)が使えるっていう機能の部分でも、遊べる範囲が広い。

で、シンプルなデザインのくせに、ものすごくこだわってる。S1で言うところ、窓の開口部の水かきの股の角度だとか、断面だとか。スポークのラインは一筆書きでは書けない、Rを重ねて重ねてつなぎ合わせた線だとか、ホントは全然シンプルじゃないんですよ(笑)。シンプルなイメージを訴えてるんで、そこしかお客様には伝わってないかもしれないです



こちらのマイスター S1も、2021スタンス山口に参加していた車両から引用させていただいた。オーナーはずっとこのホイールに憧れを抱いていて、「買えるようになってから10年以上、ずっとS1の2Pと3Pだけを履き続けている」と、S1 LOVEが止まらない。このように熱狂的に支持される背景には、どんな車両にもマッチする5本スポークの普遍性とリム設定の自由度の高さがあるからだ。

ホイールの未来、ワークの未来

最後に、これからのワークの立ち位置についても聞いてみた。ホイールを取り巻く環境とか若者のクルマ離れとか、一般的な世界の変化を、2代目はどう捉えているのか。

「昔のクルマブームを楽しんでいた人たちが今現在クルマを楽しんでいる人たちの価値観って、すごく違ってきてるのかなあ。昔はクルマを作るのって、『男くさい、オイルくさい、夜な夜な汚いガレージ』ってイメージだったのが、『カッコいいクルマに乗って出かける自分がカッコいい』とか、『時間を使って趣味を満喫している私って、すごくリアルで充実してる』みたいなストーリーを必要としている人たちにすごく使っていた。そういう人たちの右脳を刺激するようなものでないダメっていう環境に変わってきている。『お金を払ってモノを買いました、付きました』で終わりにしない。どこにいくか? だれにアピールして、だれに評価してもらおうか? そういうふうなことが一番変わってきたように思います。」

EVとか自動運転とかも気にしてますけど、逆にAーやTーが進んで100%になったら、だれもホイールを買わなくなるのかっていうと、疑問です。人間、そんな簡単



2021年のスタンスネイション山口で見つけたジーストST2。このシリーズはカラリズムに対応していないので、本来エナジーミントのカラーで塗ることは不可能なはず。それを「ムリ言って塗ってもらいました」と、オーナーは自慢していた。そういうムリがきくところも、ワーク愛好家を増やしている要因の1つ。

怠慢してたら、きっと先代の雪が私の枕元に立つと思うけど、かれこれ7年ぐらい立たれたことないから、まあいいかな(笑)」

「先代は私に、社長としての帝王学を何も教えてくれなかった」と、知加サンは話していた。だが、本当にそうだったと言えるのだろうか? 幼稚園の時分から家業の手伝いという形で現場に入り、全社員の顔と名前が分かる。完成までの全工程を理解している。図面は引けないが、見ることは出来る。旅行会社勤めのキャリアから、売り先と売り方は違えど、モノを売ることの難しさと喜びを知っている。こういった経験の1つ1つが、机の上で学ぶ帝王学よりも尊く、即戦力として使える武器であることを先代は心得ていたのかもしれない。

フランスの哲学者・ボーヴォワールの著作に、「人は女に生まれるのではない、女になるのだ」という一節がある。ワーク2代目・田中知加サンの人生を俯瞰で眺めて、スタンス・マガジンはこう思った。「彼女は社長に生まれたのではない、社長になったのだ」と。

「いいものを作って、チョイスする楽しさを企業は提供していかないといけない。ワークくんにはそういうミッションがある」



取材の帰り際、「社長のクルマって、何のホイール履いてるんですか?」と気軽に質問したところ、大ネタが引っかかった!なんと愛車メルセデスGLCが履いていたのは、この世に1セットしかない22インチの特注品だった。幅を大きく取ったリム、D字型シェイプで開けられたエアバルブの口など、さすがはワークの社長、差をつけてくれちゃってます。

LINE WORK / LINE STAMP

ワークスタンプでライン生活を円滑に!

ワークよりラインスタンプが登場だ。オリジナルキャラクター“ワークブルー”が織りなすいくつかのスタンプは第一弾として基本編を展開。オーソドックスなフレーズたちは使い勝手抜群だぞ。ちなみにワークブルーとともに登場する犬の名前は“ワンピー”だ。ワークユーザーはもちろん、カスタム好きは手に入れるべし！

問：ワーク 06-6746-2859 / 048-688-7555 / 052-777-4512
<https://www.work-wheels.co.jp>

